

マンサク

牧 幸 男

早春、里山の北斜面に雪が残り、未だ木々が眠りから覚めない頃、日差しは強くなってきているが風は冷たく、山歩きをするには少し早い季節である。落葉した裸木の時期で、里山に入ると黄金色のマンサク（満作・万作）やダンコウバイ（壇香梅）、アブラチャン（油歴青）の花はよく出会う。特に、満作は黄色の長さ約2cmほどの紐のような花が咲き、更に良い香りが遠くまで漂っているのですぐ分かる。



満作の蕾



満作花

満作は、長い冬に耐えてきた私達にとって、春が近いことを知らせてくれる花である。特に、早春の気候は変わりやすく、時には花枝に淡雪が積った風景も見ることができる。

満作はマンサク科の耐寒性落葉小高木で、本州、四国、九州の山地に普通見られ、里山近くの雑木林や谷筋の林に多く自生している。樹高は5～8m、幹は多数分枝、葉は互生し、ややゆがんだ形をした菱形の楕円形或いは倒卵形で、葉柄は短く、毛がある。春、葉芽より先に開花し、葉腋に四弁の黄色の花を数個かたまって咲く。がく裂片は4個で反り返り、外面には毛がある。花弁はこれと互生し長さ1～1.5cm、線形で屈曲し、根元は赤色、又は紫黄色を帯び、短い雄しべ4本がこれに互生する。果期は9～10月で、果実は蒴果、直径約10mmの卵状球形で褐色の短毛が密生し、黒色の大きな種子を2個含む。果実はハウセンカのように、成熟後に乾燥すると先の皮が裂けて種子が飛び散る。春の訪れを告げる木として印象深いことから欧米でも人気があり各地で植栽されている。しかし、地味な植物で早春以外には注目されることはない。



満作の果実

我が国特産の植物で、各地に生育し時には庭園や盆栽に楽しまれている。満作には、長野県北部に多い葉の上半分が半円形をしている丸葉万作、裏白丸葉満作、南部に多く晩秋に暗紅色の花が咲く赤花満作、白色の常磐満作、花弁の基部が紅色のニシキマンサク錦満作、がく片が黄色の阿哲満作等多くの種類がある。その他に、鮮黄色で香りのあるアメリカマンサク等もあるが、近年、欧米では品種改良が進み、オレンジ、鮮赤色、レモン黄色などの種類も生まれている。



満作の萼



鮮赤色の満作の花

満作の植物名は、季節に先駆けて花を開く意味の「先ず咲く」が由来と言われている。しかし、満作と呼ばれる植物は、地方によって対象に違いがある。北海道では福寿草を、群馬県では壇香梅を、その他黒文字、鬱金花、油歴青、木五倍子等を満作と呼んでいるからである。人々は、黄金色の花は秋の実りの色でもあり、春にいち早く黄金色の花が咲くこの木を、豊作の啓示と思ったのだろう。このため「満作の花が上向きに咲いた年は豊作」、「満作が咲かない年や少ない年は凶作」等の言い伝えが残っている。その他、ネジリノキ、トキシラズ、タニイソギ等と呼ぶ地方もあるが、由来は木がねじれて成長すること、春に先駆けて、あるいは谷で先駆けて咲くからである。また、葉の形が左右非対称で不整なことから、カタソゲ（片削げ）という俗名もある。

厳しい季節に咲く花だけに、花が咲く頃は農作業も本格化せず、昔は外出することも少ない時期であった。このため満作を詠んだ歌が登場するのは、明治以降が殆どである。

おおかたの 枯葉は枝に 残りつつ 今日まんさくの 花ひとつ咲く 美智子上皇后 (2011.1.5 の歌会始の御題「葉」のお歌)

まんさくや 小雪となりし 朝の雨 水原秋櫻子

植物名の由来は前述したが、漢字名は「満咲く」、「満作」を当てている。牧野富太郎博士は「マンサクは満作の意味で、満作は豊作と同様、穀物が豊に実ることをいい、この木が枝一杯に花を咲かせるので、このように言う。」と解説している。また、漢名に金縷梅ぎんろばいを当てる人もいるが、『新訂牧野新日本植物図鑑』では、間違っていると記載がある。

ポピュラーな満作の名前であるが、地方によって植物名が違うことから、次のような記述があった。飯沼慈齋氏は「立春後、開花シ、梅おくニ晩おくレズ、マンサクノ名ハマズサクノ意ナラン」と述べ、柳田国男はマンサクの名について、昔からあった名前であると述べる程度に留め、由来に全く触れてない。学名はHamamelis japonicaで、属名はギリシア語のhamame（共に）とmelon（リンゴの果実）の合成語で、花と果実を同時につける意、秋に結ぶ果実は萼がそのままついているためである。種小名は日本特産を示している。

薬用には、生薬名を「満作葉」と呼び漢方処方に使われることはないが、民間療法にはよく使われてきた。主な効能は止瀉、消炎、止血作用である。又、下痢に服用し、出血した傷、皮膚炎には煎液で患部を洗い、扁桃腺炎と口内炎には煎液でうがいをした。その他、葉と樹皮からは化粧水が作られている。製法は、金属製以外の鍋に入れ、沸騰したら火を止める。冷めてから布巾でこし、全体量の1%のグリセリンを加え分離しないようによく振って混ぜる。朝夕の洗顔後、これを丁寧にパッティングすると、タンニンが皮膚を引き締め、張りのある肌になると言う。

満作の材は極めて強靱で腐りにくく、その性質を利用して、昔から日常生活に深く係ってきた。材質の特性を茅葺屋根の骨組み結びや筏を編むのに使ったり、河岸の蛇籠、山で薪を縛るのに使ってきた。世界遺産に指定された岐阜県白川郷の合掌造の縛りにも使われているが、使用に当たって生のまま使うと、時間が経つと乾燥して良く締まると言われている。

最近では全く目にすることもなくなったが、藤蔓と同じようにほた櫛（櫛出）*を束ねたり、輪に曲げて炭俵の上下の枠に利用してきたので、山仕事では重要な役割を果たしてきた。枝は折れにくく、雪の上を歩く「輪かんじき」を編む材料にも使われた。「輪かんじき」は現在スノーシューに変わってしまったが、私は、冬山登山で満作の小枝で作った「輪かんじき」に良くお世話になった。注*：炉やかまどで使う焚き木

観賞用には、線状でねじれた花卉が美しい、秋の黄葉が美しいこと等から生け花に使われることが多い。欧米に渡った満作は綺麗に黄葉するという。

花言葉は「幸福の再来」、「呪文」「魔力」「靈感」「ひらめき」である。

